様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０１９９５

研究課題名（和文）現代社会学におけるヴェーバー受容史の再構成

研究課題名（英文）Reconstruction of the History of Weber-Reception in Contemporary Sociology

研究代表者
田中　紀行（Tanaka, Noriyuki）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：２０２１２０３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：現代の社会学理論において、マックス・ヴェーバーがどのような社会的・知的文脈のもとでどのように受容されてきたのかを、パーソンズ、S.N.アイゼンシュタット、W.シュルフターの３人の社会学者の事例に即して学説史的に考察した。これらの社会学者が競合する社会学上の立場から自らを差異化するためにヴェーバーを選択的に受容し戦略的に利用したこと、特にアイゼンシュタットとシュルフターに関しては、それぞれの理論構築の過程でヴェーバー受容の深化が「脱パーソンズ化」と不可分に関連していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヴェーバーの思想と学問的業績は非常に多面的でその全体像が捉え難いため、古来さまざまな立場の学者から多様なヴェーバー像が提示されてきた。本研究はそうした通常のヴェーバー研究から距離を置き、複数のヴェーバー解釈の妥当性を判定するのではなく、ヴェーバーを受容する社会学者の理論構築にとってヴェーバーがその時々の社会的・知的文脈の中でもった戦略的意義を明らかにすることによって、近年関係が希薄になってきたヴェーバー研究と社会学とを再び結びつける一助になると考えている。

研究成果の概要（英文）：In this project I investigated how and in what social and intellectual contexts Max Weber has been received in contemporary sociological theory, especially in the cases of Talcott Parsons, S. N. Eisenstadt and Wolfgang Schluchter. It is revealed that these sociologists selectively received and strategically utilized Weber in order to differentiate themselves from competing sociological approaches and that, as for Eisenstadt and Schluchter, the deepening of their reception of Weber is inseparably related to their “De-Parsonizing”.

研究分野：社会学史

キーワード：社会学史　社会学理論　知識社会学　マックス・ヴェーバー　タルコット・パーソンズ　S. N. アイゼンシュタット　ヴォルフガング・シュルフター

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

マックス・ヴェーバーの社会学的著作は、パーソンズの『社会的行為の構造』以来、社会学の中心的カノン（正典）としてこれまでの社会学史のなかでさまざまな立場から解釈・利用されてきた。ヴェーバーの社会学はデュルケムのように「学派」を形成することもなければ、マルクスのように「主義」として継承されることもなく、研究者のさまざまな関心によって利用されてきたという性格が強い。パーソンズが機能主義社会学の基礎の一つとしてヴェーバーを位置づけ、自らをその正統的後継者と自任したのに対し、ベンディクス、ダーレンドルフ、コリンズらのコンフリクト理論においてもヴェーバーはマルクスと並ぶ支柱であった。合理的選択理論ないしそれを拡張した理論もまたヴェーバーの後継者としての地位を主張している。

日本ではヴェーバー研究が「ヴェーバー学」として高度に専門化・自立化してきた結果、社会学の研究とのつながりが弱まり、ヴェーバー研究が社会学に与えるインパクトは著しく低下してきているのに対し、ドイツ語圏ではヴェーバーは現代の社会学の主要な理論と肩を並べる独自の「パラダイム」ないし「研究プログラム」として論じられている（G. Albert et al. [Hg.], Das Weber-Paradigma [2003]; G. Kneer/M. Schroer [Hg.], Handbuch Soziologische Theorien [2009]）。つまり、ドイツ語圏ではヴェーバーは単なる解釈の対象としての古典であるにとどまらず、現在もなお体系的な形で利用可能な準拠枠としての地位をも有していると言ってよい状況がある。

他方、近年のヴェーバー研究においては、ヴェーバー研究の膨大な蓄積を踏まえて、各国におけるヴェーバー受容史が研究対象になってきている（W. Schwentker, Max Weber in Japan [1998]; K.-L. Ay/K. Borchardt [Hg.], Das Faszinosum Max Weber [2006]; L. Scaff, Weber and the Weberians [2014]など）。しかし、社会学分野に対象を限定し、かつヴェーバーの体系的な再構成と利用という観点から行われたヴェーバー受容史研究はまだ本格的に行われていない。

こうした状況を踏まえて、私はこれまでヴェーバーを「利用する」観点から欧米の社会学におけるヴェーバー受容史を研究してきたが、本研究はそれを継続・補完しつつ新たに知識社会学的観点も加えることによって、ヴェーバー受容史の再構成を目指すものである。

２．研究の目的

社会学にとってマックス・ヴェーバーとは何だったのか？　これが本研究の出発点にある問いである。ヴェーバーの著作はその断片的性格からこれまでさまざまに解釈され、国や時代によって、また社会学者の理論的立場によっても多様なヴェーバー像が描かれてきた。ではヴェーバーはどのような社会的・知的文脈でどのように構築・利用されてきたのか。「ヴェーバーの真意は何だったのか」ではなく、ヴェーバー像の構築と利用がディシプリンとしての社会学の確立と発展の中でどのように展開してきたのか、それが社会学にとっていかなる意味をもっていたのかが本研究の問いである。

こうした問いに答えるために、本研究では次の 3 点を明らかにすることを目的とした。

（1）パーソンズ以降の社会学理論においてヴェーバーを体系的に受容・継承した主要な社会学者がヴェーバー社会学のいかなる要素に注目し、それを自らの研究プログラムの中にいかに組み入れ、いかなる方向に発展させたのか。

（2）その際にヴェーバー継承者たちが取り組んだ中心問題（実践的課題と学問的課題）がいかなるものであり、その解決にとってヴェーバーがいかなる戦略的重要性を持っていたのか。

（3）さらに、ヴェーバー継承者たちが社会学界の中で置かれていた位置と彼らの戦略、彼らにとってのヴェーバー受容の意味はいかなるものだったのか。

考察の対象はヴェーバー受容史全体ではなく、あくまで体系的な社会学理論（それもマクロ社会学理論）の分野における受容に限定される。本研究ではこの分野におけるヴェーバー受容の変遷を、パーソンズの影響圏からの離脱（脱パーソンズ化）の過程を軸として再構成する。デュルケムとヴェーバーの収斂を主張したパーソンズがその後の社会学におけるヴェーバー受容に与えた影響は絶大なものだったが、1980 年代以降、構造機能主義の衰退と社会学のパラダイム多元化状況に対応してパーソンズ的ヴェーバー解釈からの離脱が進行した。この過程をパーソンズとS. N.アイゼンシュタット、W.シュルフターの 3 人に特に注目して分析する。アイゼンシュタットは後期ヴェーバーの比較歴史社会学の継承者として、シュルフターはヴェーバー固有の研究プログラムを抽出・展開する理論家としてそれぞれ代表的存在であり、後者は現代ドイツの社会学界におけるヴェーバー研究の中心人物でもある。

３．研究の方法

本研究は基本的には社会学史の研究であるため、主要な研究方法は上記の社会学者の関連する著作やそれらに関する研究文献の読解と分析である。パーソンズ、アイゼンシュタット、シュルフターの主要著作におけるヴェーバーとそれ以外の社会学理論の位置づけを体系的に検討し、それぞれにおけるヴェーバー像の基本的特徴とその変化を跡づけることが基本的な研究方法である。さらに、ヴェーバー受容のあり方を規定した外的要因をも分析するため、1930 年代から1990 年代にかけての英語圏およびドイツ語圏の思想史・社会学史・大学史関係の文献・資料を利用した。なお、シュルフターに関しては、2018 年度のハイデルベルク大学での在外研究期間中に本人に 2 度インタビューを実施した。

４．研究成果

（1）パーソンズのヴェーバー受容に関しては、社会学におけるヴェーバー受容にとっての初期パーソンズの代表作『社会的行為の構造』（1937年）の（ヴェーバーとデュルケムの社会学の正典としての地位の確立ならびに行為理論を軸とするヴェーバー解釈の両面における）決定的重要性、ヴェーバー翻訳者としてのパーソンズの役割、パーソンズ自身の社会学理論と彼によって選択的に受容されたヴェーバー社会学との不可分な関係といった基本的な論点をあらためて検討することができた。さらに、初期パーソンズのヴェーバー受容にとっての中心的動機・関心が、経済学からの社会学の差異化によるアイデンティティ確立、また彼の構想する社会学の同時代のアメリカ社会学（特にシカゴ学派）との差異化にあったことや、戦後（西）ドイツにおけるヴェーバー受容にとってパーソンズやベンディクスに代表されるアメリカの社会学者の貢献が非常に重要であること（この点は戦前からヴェーバー研究が継続していた日本におけるヴェーバー受容と事情が異なる）などが明らかになった。

（2）アイゼンシュタットのヴェーバー受容に関しては、彼の主要な歴史社会学的著作と併せて理論的著作も検討することによって、彼のマクロ社会学理論がたどった変化を跡づけるとともに、その過程で彼がヴェーバー社会学にいかなる解釈を行い、そのいかなる部分を継承したかを考察した。アイゼンシュタットは構造機能主義の影響下にあった1960年代の著作においてすでにその基本的過程に疑問を抱いており、社会システムの制度化が構造分化への趨勢によって

一義的に決まるものではなく歴史的条件によって左右されること、その過程で特殊なタイプの社会的行為者の果たす役割が重要であることなどを想定していた。60年代末から80年代初頭にかけて機能主義に代わる多様な社会学的アプローチが提唱された際、彼は構造主義や交換理論、シンボリック相互作用論等を幅広く検討した上で、比較制度分析から「軸文明」や「多元的近代」の概念を中核とする比較文明分析へと転換を遂げた。

アイゼンシュタットのヴェーバーへの関心は、E．シルズの影響を受けたカリスマ概念の解釈や「プロテスタンティズムの倫理」テーゼの検討という形ですでに60年代に見られたが、80年代以降は『世界宗教の経済倫理』の共同研究への参加を通してさらに深化した。ヴェーバーにおける理念と利害関心の相互関係のマクロ分析や社会秩序の構築における知識人の中心的役割への洞察はアイゼンシュタットに継承されており、これらのパースペクティヴが彼の構造機能主義からの離脱においても重要な意味をもったと考えられる。他方、個々の文明を自己完結的な分析単位として扱い、それらの影響関係を考慮しない傾向はヴェーバーとアイゼンシュタットの両者について指摘される問題点であり、その克服はグローバル化の進展という条件のもとで彼らのアプローチを発展させていく上での課題として残されている。

（3）シュルフターのヴェーバー受容に関しては、主としてその 1980 年代以降の展開について研究した。そこでは彼のヴェーバー受容が一貫して同時代の社会学理論（特にパーソンズ、ルーマン、ハーバーマス）との対話を通して展開されたことや、彼の研究が異質な社会学的アプローチの総合ではなくヴェーバー固有のアプローチを他のアプローチから際立たせることを当初から目指していたことが明らかになった。また、パーソニアンと見なされることの多い彼が初期から中期にかけてのパーソンズの行為理論をヴェーバー社会学と接続可能と見なすのに対し、「システム論的転回」以降のパーソンズ理論をヴェーバー的立場とは異質なものと捉えていることも明らかになった。以上の研究成果は「W．シュルフターによるヴェーバー的研究プログラムの再構成―現代社会学理論の文脈の中のヴェーバー受容（下）」（『京都社会学年報』第 26 号）として公刊した（これはシュルフターの理論社会学的なヴェーバー研究を概観したものとしてはおそらく日本で最初の研究である）。

2018 年度には 1 年間ハイデルベルク大学社会学科に客員研究員として滞在し、シュルフター本人にインタビューを行ったほか、その学問的後継者である Thomas Schwinn 教授（ハイデルベルク大学）とも意見交換を行うことができた。これに先立って、以前から進めてきた Wolfgang Schluchter, *Religion und Lebensführung* (1988)第 2 巻の日本語訳（部分訳）を完成させ、『マックス・ヴェーバーの比較宗教社会学―宗教と生活態度』（風行社、2018 年）として刊行した。これはシュルフターのヴェーバー受容において重要な意義をもつ著作であり、上記の論文でも利用されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 田中紀行	４．巻 26
２．論文標題 Ｗ．シュルフターによるヴェーバー的研究プログラムの再構成(下) --現代社会学理論の文脈の中のヴェーバー受容--	５．発行年 2018年
３．雑誌名 京都社会学年報	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 Ｗ.シュルフター	４．発行年 2018年
２．出版社 風行社	５．総ページ数 676
３．書名 マックス・ヴェーバーの比較宗教社会学－宗教と生活態度	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関